

河川工作物の評価表の評価方法

主 項 目		調 査 項 目				
評 価 方 法		評 価 方 法				
1.河川工作物以外の遡上、生息阻害の有無	阻害なし	①滝	落差1mを目安として、遡上阻害が	無し 有り		
	阻害有り	②pH	pH5.5を基準として、遡上・産卵・生息阻害が	無し 有り		
2.河川工作物が主原因か	遡上可能	①河川工作物の落差と越流水深	落差40cmを目安として、遡上	遡上可能 遡上困難		
	遡上困難	②プールの水深と広がり	体長の1~1.5倍を基準に、遡上	遡上可能 遡上困難		
3.上流の遡上・産卵・生息環境の有無	遡上・産卵・生息の環境下にある	①水面幅(平水時)	幅1~1.5m以上を目安として、遡上・産卵・生息環境が	環境あり 環境なし		
		②水深(平水時)	魚種ごとの体長を目安として、遡上・産卵・生息環境が	環境あり 環境なし		
		③河床の組成	(ア)礫区分 1)礫なし(泥状)、2)20cm以下の礫が主に混合、3)2)以上の礫が主に混合、4)岩盤状の礫構成から、遡上・産卵・生息環境が (イ)沈み石 2)、3)について、沈み石の占有率から、産卵・生息環境が	環境あり 環境なし		
	遡上・産卵・生息環境下でない	④河川形態	可児式(瀬、淵の状態)から、産卵・生息環境が	環境あり 環境なし		
		⑤濁水の流入の有無	濁水が生息条件を超える状況を目安に、生息環境が	あり なし		
		⑥水温	産卵、生息の適温を目安として、産卵・生息環境が	環境あり 環境なし		
		⑦河川内の礫上のスギゴケ	スギゴケの付着状況	あり なし		
		⑧湧水	湧水の有無から(有れば産卵環境に適)	あり なし		
		⑨河畔林率	河川延長に対する割合から、3つに区分する(大なら生息環境に適)、大:60%以上、中:30~60%未満、小:30%未満	大 中 小		
		⑩枝沢	枝沢の有無(有れば生息・退避環境に適)	あり なし		
4.上・下流における流出可能土砂量の状況	少ない 中くらい 多い	ヘクター当たり深流内土砂量、擬似掃流力、累積深流内土砂量の関係およびヘクター当たり崩壊地面積、累積崩壊地面積の関係を考慮して評価する。	①溪流内滞留土砂量	別紙資料「河川別の流出可能土砂の評価」のとおり。 *専門家の判断		
			②土砂生産源			
5.下流域の保全対象の状況	保全対象の重要度(量と質)が低い 高い	河川工作物の改修に伴う、保全対象への影響度を念頭において判断する。	保全対象	別図資料「保全対象施設」とおり。		
6.河川周辺生態系への状況	産卵床及び生態系への影響が小さい 中くらい 大きい	産卵床及び生態系への影響が小さい 中くらい 大きい	専門家の意見を考慮するとともに、希少動植物の情報にも留意する。	①産卵床の保全	改修後の産卵床の増減から、産卵床への影響が、 *専門家の判断	小さい 中くらい 大きい
				②生態系の保全	重機等のアクセス及び改修に伴う重機等による周辺生態系の変化が	小さい 大きい
7.工作物改修等に伴う防災機能等への全体的な影響	影響が小さい:工法等の工夫により影響を回避でき、工作物の改修が可能と判断 影響が大きい:全体的な影響が大きく、工作物の改修が困難と判断(現状維持)	主項目4、5、6の全体的な評価結果を総合的に検討する。	①工作物改修等に伴う防災機能及び河川周辺の生態系への影響	河川工作物改修に伴う防災機能への影響等(4、5、6)の全体的な検討結果から、 *専門家の判断	影響が小さい 影響が大きい	
8.工法の選択等の検討	可能性有り 可能性無し	工法の選択の技術的側面及び経済的環境を総合的に検討する。	①河川工作物改修の技術的・経済的可能性	工法の選択と経済的環境の検討結果から、可能性が、	有り 無し	